

を指すものとして、当時アルゼンチンで実際に用いられていた用語である。本年は、主にその精神病理学的＝犯罪学的な眼差しの広がりを明らかにし、それが社会管理の技法としてどのように進展していったかといった点を中心に研究を行った。

犯罪者は生まれながらにして犯罪をおかす素質を宿しているとする〈生来性犯罪者〉説をとなえて、一躍時代の寵児となったイタリアの犯罪学者チェザレ・ロンブローゾの理論が喝采を浴び、その後賛否両論を巻き起こしながら犯罪学の領域をきりひらいていく出発点になったのは、1885年にローマで開催された第一回犯罪人類学国際会議である。アルゼンチンはラテンアメリカで最初にこの〈科学〉を取り入れた。国際会議の2年後、ブエノスアイレス大学法学部では、1885年の実証主義的な提起を全面的に支持するとの宣言がなされ、これをうけるかたちで翌年、司法人類学協会がブエノスアイレスに設立され、さらにその翌年にはブラジルでも同様の協会が興されて、アルゼンチンとブラジルは19世紀のラテンアメリカにおける犯罪学の中軸のひとつを形成した。実証主義的犯罪学への言及は、1889年にはメキシコで、1890年にはコスタリカで、1892年にはチリの諸大学の教育現場でなされるようになり、1899年には犯罪人類学と身体測定学の講座がキューバのハバナ大学におかれるようになった。

アルゼンチンにおける犯罪学の進展過程を考えるうえでもっとも顕著なのは、初期の段階において、すでに社会監視と排除のための学的営為とその社会制度上の装置の形成が密接な連携をなしていた点である。ブエノスアイレスの国立刑務所内に創設された犯罪学研究所は、犯罪者を対象とする諸学問間のネットワークの総体として構想された。研究所でシステム化された「犯罪因学」―「犯罪臨床学」―「犯罪治療学」という、相互に参照し協力しあう緊密な学問上のネットワークの体系が、〈既往症〉―〈診断〉―〈予後〉からなる医学モデルにその規範をとっていることはいうまでもない。こうした医学モデルを社会に応用する実験は、すでに19世紀後半のブエノスアイレスで急速に進展した衛生学のなかで実現されていたことは事実だが、システムティックな学問機関としてひとつの場を与えられ、行政当局と社会的機能を分担しあいながらも、当局にたいして自律的な言説空間を構成しようとしていた点で、犯罪研究所はきわだっていた。

1880年代に盛んに論じられた大衆論は、犯罪学の領域では、移民大衆を〈良い移民〉と〈悪い移民〉に弁別する必要性として表出したが、それが具体的な個体識別のテクノロジーとして結実したのは指紋押捺の義務化であ

模倣の文化政治：ラプラタ地域における 〈他者〉の領有をめぐる文化的抗争の分析

Cultural Politics of Mimicry. Analysis of Cultural
Conflicts on Appropriation of "Other" in La Plata.

林 みどり

HAYASHI Midori

本研究は、ヨーロッパ移民によって大衆社会が形成されたラプラタ地域を対象に、早熟なモダニズムが出現しつつあった19世紀末から20世紀前半の社会文化現象を分析するものである。「模倣」とは、精神病理学的＝犯罪学的な眼差しでとらえられた都市大衆社会の「社会病理」

る。一般市民にたいする指紋押捺の義務が構想され、きわめて早い時期に実現されたのがブエノスアイレスであったことは、同時期の犯罪学的な言説の磁場の強度を考えれば少しも意外ではない。

そもそも指紋による個人の同定が、イギリス植民地主義政策による流用の産物であることはよく知られている。1870年代にベンガル地方フーグリー管区の一行政官が、ベンガル地方で古くから用いられてきた指紋で個人を弁別する仕方に目をつけ、植民地経営の統治技術として用いることをめざした。最終的には優生学者フランシス・ゴールトン卿が指紋識別をひとつの技術として体系だてた。ゴールトンが指紋のなかに人種的な特徴を見だし、もって大英帝国の周縁を序列化し図表化しようとしていた頃、帝国の植民地主義的な欲望が展開されつつあった周縁のアルゼンチンでは、その知を統治実践のテクノロジーとして用いようとする動きが出現したのである。それがフアン・ブセティッチによる指紋識別システムの実践への応用だった。

イギリスの植民地支配をうけているベンガルのひとびとから盗みとられたひとつの知の形態は、その知を有していたベンガルの被支配者を統治するための植民地主義的な技術としてふたたびかれらへと投げかえされた。他方でその知は、帝国の知の体系の周縁に組み込まれていた別の地域の支配的知識人によってひそかにもちだされ、流用され、現地で改良が加えられ、世界発の指紋による犯罪者逮捕という具体的な成果として結実されただけでなく、犯罪者以外の一般市民へと拡大されようとしたのである。